

氏名	早川由真
学位の種類	博士(映像身体学)
報告番号	甲第574号
学位授与年月日	2021年3月31日
学位授与の要件	学位規則(昭和28年4月1日 文部省令第9号) 第4条第1項該当
学位論文題目	〈ニュー・ハリウッド〉期のリチャード・フライシャー ——映画的身体の存在論
審査委員	(主査) 中村 秀之 横山 太郎 藤井 仁子(早稲田大学文学学術院教授)

## I. 論文の内容の要旨

### (1) 論文の構成

本論文は、本文 126 頁 (A4 判・ワープロ打ち、172,358 字) と「初出一覧」、  
「リチャード・フライシャー監督作品一覧」、「引用文献・映像資料一覧」から  
成る。構成は下記のとおりである。

#### 序論 リチャード・フライシャーと映画的身体

1. 映画作家フライシャー
2. 〈ニュー・ハリウッド〉期のフライシャー
3. 映画的身体の存在論

#### 第 1 章 白の存在

——『絞殺魔』(1968) におけるカーティス/デサルヴォの身体

はじめに

1. スター・イメージとデサルヴォ像
2. 不可視の動作主と主体化のメカニズム
3. 可視化の暴力と身振り

おわりに

#### 第 2 章 声になるまえに

——『10 番街の殺人』(1971) における呼吸音と身体

はじめに

1. 語りと音
2. クリスティとエヴァンズ
3. 呼吸音

おわりに

#### 第 3 章 顔のない殺人者

——『見えない恐怖』(1971) における〈盲者の視点ショット〉と  
キャラクターの生成

はじめに

1. サラの「視点」
2. ジャッコという存在
3. 〈不在者〉と顔

おわりに

#### 第 4 章 閉塞とスクリーン

——『ソイレント・グリーン』(1973) におけるキャラクターの死

## と映画的身体の生命

はじめに

1. イメージのない世界
2. 「ホーム」のスクリーン
3. 映画的身体の生命

おわりに

## 第5章 光のポリティクス

——『マンディンゴ』(1975)における色調と身体

はじめに

1. イデオロギーと色調
2. 薄明かりと斜陽
3. 光と暴力

おわりに

結論 映画的身体の受難=情熱に向けて

初出一覧

リチャード・フライシャー監督作品一覧

引用文献・映像資料一覧

## (2) 論文の内容要旨

本論文は、アメリカ合衆国を国籍にもつ映画監督リチャード・フライシャーが、〈ニュー・ハリウッド〉期すなわち 1968 年から 1975 年のあいだに手がけた 5 本のフィルムを対象にテキスト分析を行うものである。作家主義的な批評の多くはフライシャーを「作家」として認識してこなかった。フライシャー作品のもつスタイルの独自性に着目した先行研究や批評テキストはいくらか存在するが、その歴史的な意義や映画理論における意義について、映画研究（映画学）の領域で十分に論じられてきたとは言いがたい。つまり、フライシャー作品にかんして学術的な要件を満たすような体系的な研究はいまだ存在していない。本論文の目的は、新たな理論的・方法的視座を導入し、これまでには見過ごされてきた作品の細部に光をあてることで、フライシャー作品のもつ歴史的・理論的な意義を明らかにし、映画研究の領域に新たな知見を提示することである。本論文が導入する理論的・方法的な視座とは、映画的身体の存在論というアプローチである。

序論では、上記の目的の説明に加え、〈ニュー・ハリウッド〉を対象とするうえでの諸問題を述べたうえで、方法としての映画的身体の存在論的アプローチについて詳述する。プロダクション・コードが崩壊し、様々な世代の作り手が現れた〈ニュー・ハリウッド〉は、アメリカ映画史において混沌とした時期だ

と言える。〈ニュー・ハリウッド〉をとらえるうえで、先行研究は暴力的・性的イメージの可視化および氾濫に着目してきた一方で、ヴェテラン世代であるフライシャーの作品をほとんど無視してきた。だが、本論文が対象とする 5 本のフィルムは、〈ニュー・ハリウッド〉に対して独特の仕方で批判的な距離を提示しているのだ。それらは、「古典的」あるいは「ポスト古典的」という二項対立ではとらえられない複雑な性質を備えている。それらのフィルムをとらえるうえで鍵となるのは、映画的身体が提示される独特の仕方にもなう暴力性である。

映画的身体とは、視覚的な身体イメージ（映像）と聴覚的な声（音）の多様な結びつき（あるいは分裂）によって構成される存在である。映画的身体の在り方やそれについての経験を規定しているメカニズムそれ自体、とりわけ映画の原理的・技術的な特性それ自体を反省的に浮かびあがらせることを、本論文では存在論的アプローチと呼ぶ。映像と音の分裂、あるいはフレーミングやモンタージュによって断片化した映画的身体は、一本のフィルムのなかで統一され、なんらかの同一性を備えることになる。〈ニュー・ハリウッド〉期のフライシャー作品は、同時期に氾濫した激しい暴力表象とは異なる暴力性を、そのような映画的身体の統一に関連した仕方で提示している。すなわち、それらのフィルムは、イメージが可視的に示されることそれ自体が孕む暴力を提示し、さらにそのような暴力に対して映画的身体が受動的に巻き込まれることを、映画的身体をキャラクターとして統一するメカニズムとの関連において、それぞれの仕方で提示するのだ。このような仕方で提示される暴力性は、同時期に対する批判的な距離として表れている。以上が本論文の全体を貫く主張である。

各章の概要は以下の通りである。まず第 1 章では、『絞殺魔』でトニー・カーティスが演じるアルバート・デサルヴォという存在について論じる。先行研究は、デサルヴォが〈第 2 の人格が真犯人である分裂した存在〉であるという前提に立っていた。だが、この作品にはこうした前提では理解できない部分がある。そこで、テキスト内外の諸要素を多角的な観点から分析し、デサルヴォの在り方の特異性を明らかにする。まず、スター・イメージやメディア言説におけるデサルヴォ像を検証したうえで、不可視性や声を手がかりに、デサルヴォを真犯人として見せるプロセスにおける綻びを見出す。そして、デサルヴォをキャラクターとして主体化しようとする可視化の暴力のメカニズムを明らかにし、最終的には映画的身体という存在を規定する原理そのものが反省的に問題化されていることを指摘する。

つづく第 2 章では、『10 番街の殺人』における映像と音の分裂的な関係に着目する。この作品では、声と比べてこれまでの映画理論ではあまり着目されてこなかった呼吸音という要素が重要な意味を持っている。まず、この作品におけ

る即物的な音の使用法を確認しつつ、60年代後半から70年代のドルビー・システムに至る録音・音響技術の変革の流れのなかに作品を位置づける。次に、声や呼吸音、さらに身ぶりの分析を通じて、目的を志向するジョン・クリスティ（リチャード・アッテンボロー）と不安定なティモシー・エヴァンズ（ジョン・ハート）というそれぞれの存在様態を対比的に描きだす。そして最終的に、呼吸音という要素が、声とは異なる仕方では身体イメージへの帰属から逃れてゆくことを明らかにする。

第3章では、『見えない恐怖』を対象に、キャラクターの生成（およびその不成立）のメカニズムを論じる。鍵となるのは、盲目の主人公・サラ（ミア・ファロー）が入浴中に襲われるクライマックスにおいて、カメラが水中から殺人者を見上げるショットの意味作用である。まず、サラの「視点」を示すかのようなこのショットを〈盲者の視点ショット〉としてとらえる視座を導きだす。次に、縫合理論をキャラクターの生成という観点から整理しつつ、殺人者というキャラクターの生成（およびその不成立）のメカニズムを明らかにしていく。最終的に、水中からのショットにおいては、不可視性と暴力が錯綜した複雑な事態が生じていることが浮き彫りになる。

第4章で論じるのは、『ソイレント・グリーン』が提示する、キャラクターの生／死にとどまらない、映画的身体の独特の生命である。そこで着目するのは、「ホーム」という施設でソル（エドワード・G・ロビンソン）が絶命するクライマックスのシーンである。このシーンは、これまで環境に関するソルの内面的なノスタルジアという観点から説明されてきた。しかし、このシーンの重要性は、イメージや音との遭遇という出来事、そしてこの遭遇によって死に至ることにある。そこで、映像と音の原理的な分裂を手がかりに、このシーンで描かれる死の意味を作品に即して明らかにすることで、映画的身体の生命の在り方を浮かびあがらせる。

最後の第5章では、『マンディンゴ』における色調と身体について論じる。南北戦争以前のアメリカ南部における奴隷制を描いたこのフィルムは、露骨な人種差別や大胆な性と暴力の描写によって様々な議論を巻き起こした。本章で着目するのは、このフィルムが差別や暴力を光の設計という原理的なレベルで問題化していることだ。鍵となるのは、周到な光の設計によってもたらされる、「白(人)」と「黒(人)」という二項対立ではとらえられない映画的身体の曖昧な色調である。そうした曖昧な色調をもたらす光の設計と、「白」と「黒」という属性を明確に区別する光の設計を分析していくことで、キャラクターの同一性を顕在化させるメカニズムの暴力性を明らかにする。そして結論では、以上の各章の議論を総括するとともに、発展的な今後の課題を提示する。

## II. 論文審査の結果の要旨

### (1) 論文の特徴

本論文は、リチャード・フライシャー (Richard Fleischer, 1916 - 2006) が監督した 5 本の長編劇映画を対象として、映画の原理的特性という観点から作品中の身体イメージを分析することで、それらの作品の意義を明らかにした研究の成果である。その意味で、本論文は人文学的な映画研究 (film studies) における作家研究に属する。とはいえ、監督の人間性や「世界観」を伝記的事実にもとづいて論じることや芸術家としての卓越性の称揚を主眼とする企てとは異なる。作家に焦点を合わせた作品研究である。特に、これまで看過されてきた作品の奇妙な特質に注目し、その特異性が映画それ自体の根本的な存立条件を開示していることを解明した点に本論文の他に類を見ない特徴がある。

また、本論文は監督のキャリアと作品の全体を対象とする網羅的なモノグラフではない。分析の対象は英語圏の映画研究が〈ニュー・ハリウッド〉と呼んで議論を重ねてきた 1960 年代末から 70 年代半ばまでの時期の作品に絞られる。その選択の根拠は本論文の出発点となった次の直観にある。すなわち、それらの作品は、アメリカ映画史上、特に過激な暴力表現が追求されたこの時期に、まったく別種の暴力性と呼べるような特質によって時代の傾向から積極的に隔たっていて、その特質こそが映画の原理に関わるという認識である。

そのような作品の特質に迫るために、本論文は独自の視座を設定し、それを「映画的身体の存在論」と名づける。ここでの「映画的身体」とは、スクリーンに映る映像とスピーカーから響く音響の複合的效果として出現する人間の身体イメージを意味する。映画作品、特に物語映画は、映像と音響の断片の不安定な集積である身体イメージを複雑な技法によって緊密に結合し統一性を与えることで何らかの同一性を備えたキャラクターへと形成する。これ自体は物語映画のありふれたメカニズムであるのだが、まさにその作用を周到な仕方で自己反省的に露呈させている点にフライシャー作品の特異性があるというのが本論文の根本的な仮説である。したがって本論文は、個別の存在者として顕在的に成立するキャラクターとそれを生成させる映画的身体の潜在的な在り様との相互作用の解明を課題とし、それを「存在論的アプローチ」と呼ぶ。

このような問題設定にもとづき、本論文の各章は、対象とする作品の特質に即して、フレーミングやカメラの動き、モンタージュ、ノイズ的音響、照明と色彩の設計といった多様な映画技法に焦点を合わせ、物語内容と関連するそれらの効果と意味を精密に分析した。

第1章の『絞殺魔』論は、いかにも連続殺人事件の犯人であるかのように見える主人公のキャラクターが、実は、その身体イメージに同一性を押しつけて「主体化」する映画メカニズムの所産であることを暴露した。さらに、物語の中で厳しい追及を受けた主人公がついに錯乱に陥り、その身体が無名の存在となって白さに溶け込む衝撃的な画面を映画の自己反省的表現として捉えた。

第2章の『10番街の殺人』論は、2人の主要登場人物のキャラクターが（台詞や声ではなく）呼吸音というノイズ的音響によって対照的に構成されていることを明らかにした。加えて、この作品の重要な場面で微かに響く音を鋭く聞き取り、それが特定の身体に帰属しない呼吸音であることでキャラクターの個別の生とは異なる映画的身体の無名の生命を表していることを主張した。

第3章の『見えない恐怖』論は、身体の可視と不可視を巧妙に操作する断片的なフレーミングが、物語の点では殺人者とみなされるはずの人物のキャラクターを最終的に成立不能にしていることを論証した。しかも、その人物の顔が盲目のヒロインの視点ショットという例外的手法で示されることで、そこに映画の存立の条件である不在それ自体が現れるという含蓄ある解釈を提示した。

第4章の『ソイレント・グリーン』論は、環境汚染と食糧不足が深刻化した近未来の世界で安楽死を選ぶ人物の最期に焦点を合わせ、このキャラクターの死が、その身体における映像（顔）と音響（声）の分裂によって表現されていることを証明した。のみならず、キャラクターの死後、身体から離脱した声が風の音へと転じて映画的身体の生命を象徴することになると大胆に結論づけた。

第5章の『マンディンゴ』論は、南北戦争以前の奴隷商と奴隷との関係や異人種間の性交渉を題材とするこの作品が、その人種的キャラクターと関係性を2つの対立する光の設計によって周到に視覚化していることを解明した。「黒」と「白」として区別される属性を曖昧にして身体の接近を支える微妙な色調の照明と、その差異を強調して分離と差別を固定してしまう照明である。

結論は、各章の論点を振り返った後、今後の課題として、フライシャーの作品以外にも広く見出すことができる映画的身体の受動性に注目することによって本論文の主題を一般化して展開する可能性を示唆した。

このように、本論文が解明したフライシャー作品の特異性は、通常は隠されている映画のメカニズムを作品自体が物語内容と関連する形で露呈させていること、そのメカニズムを失調させる映像や音響の要素の離脱や分裂が自己反省的に生起すること、そして、この2つの作用がまさに作品を成り立たせている点にある。実は、本論文は映画的身体への関心だけでなく、むしろ映画それ自体の存在、映画というものが「ある」ことへの根源的な驚きから発した研究のようであり、そこから本論文の独特な魅力と難解さが生じていると思われる。

## (2) 論文の評価

当審査委員会は本論文を高く評価する。テーマが斬新かつ明確であり、周知なりサーチにもとづき、理論的な視座と作品分析の実践との関係も整合的で、構成にも隙がない。その意味で人文学の論文として 1 つの模範的な在り方を示していると言って過言ではない。以下、具体的に本論文の意義や長所を挙げる。

1. 人文学としての映画研究 (film studies) が対象と方法において多様な発展を遂げつつある中で作家研究は主流の分野の 1 つであり続けている。本論文はその作家研究に新しい地平を拓いた画期的な業績と言える。学術論文として世界的にもほとんど初めてのリチャード・フライシャー研究と思われ、それだけでも評価に値するが、ウェルメイドな商業映画の作り手とみなされてきた監督の作品が、実は、映画の原理を自己反省的 (メタ映画) に露呈させるラディカルな美学的特質を備えていることを明らかにした意義はきわめて大きい。

2. しかし、フライシャーを「映画作家」として発見したのは本論文ではない。欧米では「作家」として認知されてこなかったフライシャーを日本では蓮實重彦や黒沢清を中心とする批評的コミュニティーがつとに高く評価してきた。本論文の功績の 1 つは、非学術的映画批評 (いわば文芸的な批評) の洞察を映画研究の問いに定式化し、学術的な方法によって成果を挙げたことにある。

3. 行き届いた調査によって議論がしっかり裏づけられていることも本論文の高く評価できる点である。映像資料については、映画館での観覧ではなく DVD やブルーレイの視聴という技術的条件の下で音響や色彩を論じる限界が慎重に配慮されている。文献資料については、先行研究が乏しい中で精力的に渉猟し、英語文献はもちろんフランス語による批評やドイツ語の論文まで適切に利用した。さらに、ロサンゼルス映画芸術科学アカデミーの図書館が所蔵する一次資料について現地で調査を実施し、その成果は論文中の要所に盛り込まれた。

4. 本論文の非凡さは、既存の映画理論を個々の映画作品の分析へ巧みに適用した点にも認められる。今や古典と言える 1970 年代の欧米の映画理論 (『カイエ・デュ・シネマ』誌のジャン=ピエール・ウダールや『スクリーン』誌のステイヴン・ヒースのそれ) の現在でも有効な着想を古い文脈から解放し、具体的な作品分析に活用した手際は見事である。

5. そして、その作品分析にこそ本論文の最大の価値がある。作品とは、経験的な観客が知覚する以前につねにすでに何らかの仕方で構成されている独自の世界である。本論文はこの点を確認した上で、視覚と聴覚を集中して微妙な細部から全体の構造に至る個々の作品の独自性を明らかにした。優れた人文学的研究はしばしば批評の喜びを与えてくれるものだが、本論文は精緻でときに大胆な分析によってそのようなテキストの 1 つになりえている。



とはいえ、本論文にはいくつか不十分な点もある。まず、〈ニュー・ハリウッド〉期に関する歴史認識が一面的であるため分析対象をその時期の作品に限定した戦略が必ずしも説得力を持ちえていない。これは日本の映画批評と英語圏の映画研究の違いやその接続に起因する問題とも考えられるが、その点の説明が不足している。次に、概念の規定や使用法が厳密さを欠くことで議論が曖昧になった点がある。特に論文全体を貫く「暴力」というキーコンセプトが各章の文脈によって微妙に異なる意味で使われているのだが、それについて自覚が足りないように見えるのが惜まれる。最後に、レトリックに依存して叙述が強引になった箇所があり、学術論文として気になる点である。

このような難点があることは否めないものの、上述した本論文の意義や価値を疑うことはできない。リチャード・フライシャーの作品における身体イメージとキャラクター形成の錯綜した関係とその意義を綿密な作品分析を通して明らかにした本論文は、貴重な事例研究として現行の映画研究に大きく貢献するのはもちろん、映像と身体の関係を対象とする、より広範で多様な学術的探求にも寄与することが期待できる。

なお、本審査委員会は審査の過程で、本論文の完成度をさらに高めるために限定的な修正を要求し、申請者はこれに応じて修正を施した。最終試験はこの修正版にもとづいて行われた。

本審査委員会は本論文を総合的に判断し、その価値、意義および課題について検討した結果、本論文は期待される要求水準を十分に満たしたものであり、博士学位の授与に値すると判断する。